

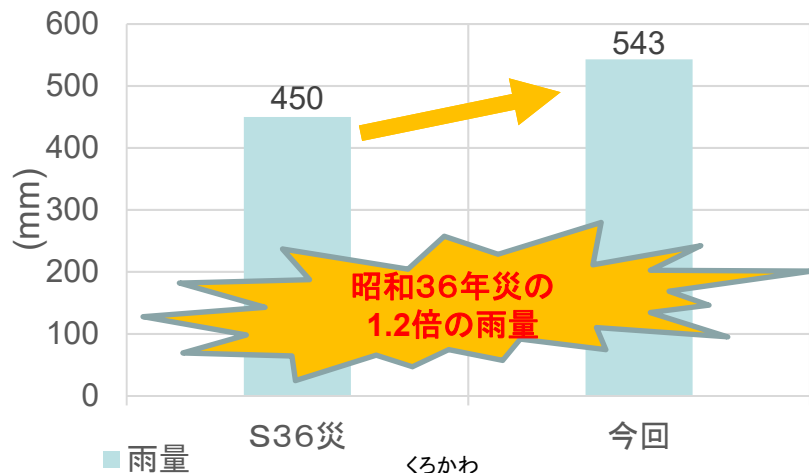
着実な砂防施設の整備により土砂・洪水氾濫を防止

～ 令和3年 8月梅雨前線による伊那谷の豪雨 ～

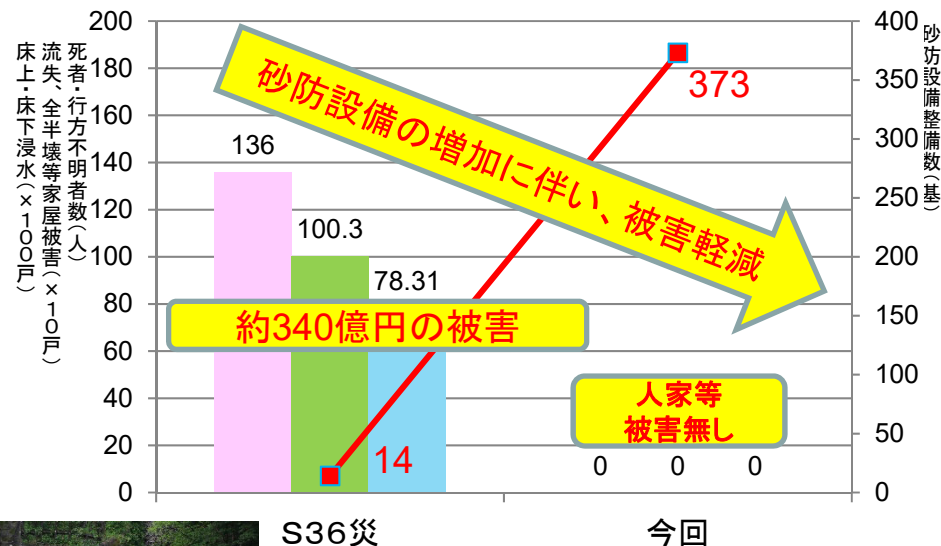


- 令和3年8月 梅雨前線により、戦後最大の災害「昭和36年災」を超える543mmの3日間雨量を観測、流域の砂防施設が効果を発揮。
- 昭和36年災では136人の死者・行方不明者、8,800戸を超す家屋被害が発生したが、その後の**着実な砂防施設整備により、土砂洪水氾濫を完全に防止**。
- 昭和36年災以降の砂防の設備投資約2,100億円により、流域の約2,600億円の資産に対して被害を軽減。
- 今回は昭和36年災を超える豪雨による被害は防止できたが、**今後予想される気候変動の影響による大雨に対応**するため更なる整備を推進していく必要がある。

昭和36年災と今回の3日間雨量の比較



昭和36年災の出水の被害状況と今回の比較



令和2年7月完成時



砂防堰堤整備により土砂・流木を捕捉

土砂 約44,000m³
流木 約800m³を捕捉

令和3年8月出水後



S36災

今回

- 死者・行方不明者(人)
- 流失、全半壊等家屋被害(×10戸)
- 床上・床下浸水(×100戸)
- 砂防設備整備数(基)

※砂防設備整備数は天竜川流域の直轄分の集計
 ※被害状況は天竜川流域(長野県)の集計(天竜川水系河川整備計画より転載)
 ※3日間雨量は天竜川流域(長野県)での最大の雨量観測所の値(太田切川)
 ※被害額は天竜川上流域の当時の被害額
 ※資産(便益)は1/100洪水時の土砂・洪水氾濫における被害から計算